

新撰字鏡小学篇について

高松政雄

大凡、倭字（国字）に於いて云々する場合、新撰字鏡の小学篇を引くのが第一である。例として、周語字鏡奥「国字」の項で、「通常、国字・和字といふは新撰字鏡の小学篇字約四百を以て、異体的な例が早いものとす」といふように説明が代表的である。諸書にこれに同ずる。しかして、山岡彦雄氏も言わぬやうな、<sup>①</sup>「小学篇の字が果してすべて月事掣のしやうか」といふのは、未だ「実証されてはいない」といふ現状である。さういふことを以て、恰も実況が如く考ふる通説は矛盾がある。こゝに疑問を起す、もしも先ず、この小学篇字とは一体どういふものか、検討してかゝるといふことが、手摺の出来ぬものである。せしめて、倭字とは如何なるものかという概念を、それによつて倭字の消長等と問題は一般的にたがっていくべきであるが、手摺にはまだセウ入ロの所を徘徊する程度に止まらう。

抑々、新撰字鏡自体が元来不整備なもので、多分當れ増補されたフ成りし故に疑問の持てる所は既に指摘されてゐる。さういふものの中にある小学篇である。大抵、「小学篇」といふのも実はよく分つてゐない。蓋して、周井撰音序士は、<sup>②</sup>「小学篇」といふ書は王羲之の撰で一卷だけあることば隋志にも出て居るが、この新撰字鏡が音を附けぬ所を見うして書かへ引いた下は音かろうしと言われ、また抗りて、「私も思ふに知製字なる婦コナミ、嫁ハナリ、さうかく大抵セウ思ひ寄うた節が分るべきだが、肩削のニ字（雖は未だ肩削志未留）など一向に分らぬを見うと、邊大城が誤字とも云ふべきなり。しかして、かく肩削に附し且つ音を出さぬ事は何か特殊な訳があり、今も肩削しておくと、いかに悩むを致すかやうな形に違へらぬと云ふ。私もしては石以外に一歩も出さぬとは出来ぬ。これ故、「小学篇」なる書（或いは某書の一部）の外部的追記はよくなし得るやうで、今は専ら、現在見得る形での内部分類の的を絞るべきである。

現在唯一の完全な天治本に於いて、この小学篇字の

本末は正々である。巻頭の篇五次第は、何れも明記して  
ないが、各巻頭の目次には、七れを承りしつゝある。即  
ち、本場と軍部は、巻七に

小学篇又軍不異名第六十九 小学篇百五字

小学篇字 九十二字及本草軍部名第七十一

とはつり)項目に立てる。また、巻四の西御部第四十四に

は、「小学九字」とありて分調にあらば、巻八の十二

部 文数千九百八十字 小学篇字百八字 と言ふだけで、

と云はれ小学篇が含む以上、小学を先かきれば分る

い(実在 鳥部と虫部)。他は、目次には不明であら

て、本文に至りて始めて、七の字数が知れりである。

七の本文に示し方より、一様である。次々、ハツリ

小学篇字を有する部を併載を賜はせしむる。 (小学篇は

外)本文を採りて本篇と名付する

女部等 本篇・已上五字出自小学篇

西御部等 本篇・已上九字出自小学篇

金部等 本篇・以下出自小学篇

木部等 (小学篇 分字)

艸部等 (小学篇 分字)

鳥部等 本篇・小学篇字

虫部等 本篇・小学篇字 分字

魚部等 本篇・次小学篇字 分字

右の如く各部共通するものは、「小学篇」とあるが、これ

が今以て不明であるのは前記の如くである。ところが、

この小学篇字を、留置が特別に扱はれたことは、七の序文

にも明らにあらはれる。即ち、序文には本文の成る由来を述

べ、七の後に

亦據 小学篇之字及本草之文 録非字字數 等閑撰入

七

と云ひ、また次いで、字數の動定の條にも、

文數式万九百卅余字 又 小学篇字四百余字

と云はれる。つまり、本草の漢字とは別として、七の

序文、七の漢字數は八にあらはれる。さういふ待遇を

受ける小学篇字は、疊として、右に記される如く、四

百余字である。七の七の一般には受ける入らぬとい

ふが、この「四百余字」は疑わうとすべし。疑わしき

得る。七の「先ず」は刻法、或は書かぬといふは、矢に

てである。本文には、よく以て効力な五ヶ所は刻法が

施されてゐるが、七の「先ず」は、刻法を以ては、字

の不用のりである。一つは漢脱の類する。七の

片数壹佰陸拾 未在部字等（字知本：未在臨時部等不入  
數）

の所で、意味するところには字知本で分るが、しおし、天  
治本で見ると「片数」とは舐触する。「片数百六十」は天  
治本では「臨時部」を言わねらびである。即ち、臨時部を  
字知本百六十といふやうな九章の細分をしていふ（巻頭第  
五次字知は誤りである。巻末十二巻頭の目次及び本大に  
は字知百六十一以下で着字はない）。この割注は天治本で  
は意味不通であり、字知本ではもしも天治本の篇立と同じ  
体裁の起本を考ふる限りは、字知本が生ずる。臨時部が第  
百六十一になる著述ならば問題ないのである。こ  
ういふ割注であるならば、躊躇なく舐触し得るやうである  
が、当面「四百字」の箇所はさうはいかない。俣字  
の字知を考ふる際、内容に方々の影響するからである。  
ていど少く吟味してかると、どうやらこの辺りから  
つきが見えぬ。原本はさういふやうな、大いに疑問を  
感ずるやうである。実はこの序文も、全体が言わねらび  
「知本を交えた序文で、読み難い所が多い」といふのであ  
る。大意を尋ねれば支障がなくても、細い矢には問題  
があり、殆ど字知のやうな所は然然としなれ、代本的な箇所

分るやうである。大那から言へば、前々小学篇字は「非字字  
数」（字知本には「非字之教内」と述べているやうである  
から、「文数」何字で以て、小学篇字を言ふゆゑには分  
つていよう。殆ど字知本で「小学篇字四百字不入数」は  
冗言である。それより九章の、これは割注にして、  
「文数、或九百卅字、又、小学篇字四百字」といふ  
方が解り易い。ところが、次が

狹正之外 連字重矣字等不入於教

「此」は何を指すやうか。本篇の「文数」は、本篇と小学篇  
の字数の、或いは小学篇の、結果的に、小学篇と  
連字・重矣字等を算定しなれというのとであるが、この  
終には違意の字とはし難い。これに於て「如是二章之内  
」の「二章」も不明確である。殆ど字知本で「不入数」  
「不入数」は「不載於教」はもとほは字知本に於ては  
わいふ。もしさうとすれば、十二巻、百六十片、二万九  
百卅字と統りて、すつさうした形になる。唯、さう  
しても、「如是二章」は問題として残るはさうだが、今、  
月九筋に於ける序文よりは後統が自然であるやう。そ  
で、これには、現本本にもさういふ。字知本本に、違  
字が注文に於てはさういふ乱れを、さういふ序文に

し方としてよい。そして、注文は序文に關する限りすべて、  
 原書が眉注の字を知らなかつたので、後人の補入の感  
 感を強く抱くやむを得ない。そのうち意味に、「小学篇字四  
 百字」は疑われない。和田英松博士が「抄部」小学篇の  
 文字はハナヒ文字が序の字のよきと二十字は知翠の字  
 に當り、と指摘されたのは、逆の言えよ、上巻の觀念の  
 ら、小学篇字四百字を疑つたことであろう。しかし、そ  
 れにも拘らず、これはこれとして、その四百字が天治  
 本に現れ見える限りは、その時分（一一二四年）にはそ  
 う認められていたものと前掲の抄部は一往をたゞざるを  
 得るやうである。疑いのかけらもなきが、ミラ「四」  
 を疑ひ、またその注を入れた人乃至事柄を問題にして、  
 それに唯單に穂條の世帯で行なわれるべきは、事は何等  
 解決しなかつた。要は、疑いの月を以て、眉注の眉注  
 年間（八九八・九〇〇年）に果して、その新訂の字  
 があつたやうなわけ、もしそうだとすれば、その後、  
 二百年の間に、どういふ増補がなされたかどうであるか  
 具體的に見ると、行かなければならぬのである。その  
 際、序文をどういふ状態に、万葉集の「万葉集」の「万葉集」の  
 題となること、その「万葉集」の「万葉集」の「万葉集」の

さて、具體的に小学篇字の検討に入る前に、その  
 序文の概念規定をしておかねばならぬ。私は前掲「  
 序文」なる附録を追つて、主として序文の「万葉集」の  
 字鏡まで遡つておこなう。⑤ 七は、序文の「万葉集」の  
 ないから、その一往の規定はして知れた。今もその  
 序文は先づ認められてきたことによつて、私見の肉付けをし  
 ておこうと思ふ。知名抄を見るときは、その外にも、大  
 字同の頃、どういふものがあつたかという事柄を念じてお  
 くの、序文よりはその進めは整然とした組織を有し、進め  
 の態度を態度で字の臨むべきの序文はよつと確めるとい  
 う事もある。

知名抄には、「未詳」なる注記が七十等ある。その  
 中、字形に關するものは、私に調べたところでは、二  
 十以上あり、その中、過半数乃至大部分がどうやら「未詳」と  
 考へられるやうである。これは、その「未詳」の「未詳」の  
 未詳」にどうも、その「未詳」の「未詳」の「未詳」の  
 漢字集には存せず、中には「俗用」と注されたものもあ  
 り、その「俗用」なる字を益々おぼつた所は、その「未詳」の

当然であるからである。今、セウ内訳を按してかると、  
次々四つの種類に分けられる。これと私の言葉で説明し、  
それと所属する字を挙げて、以て吾輩の未詳字の全貌を  
示そう。

〔甲〕 狹き字。漢字彙には全然見えない字。狹  
音の等位、或は言ふは、聖固所製（或は所造）字。例字、  
拙豫悝悝痲葦荳蠟梓梓過鏡駢鱗鱗所詳葷葷

〔乙〕 広き字。漢字彙にも存するが、セウに於て  
此の過控の異なり。漢を主として言ふは、セウに於て  
あり、所謂固詞となる。知らざる言はば、亦々々トする  
事柄の意に合うようにして作りおられたもの。結果的に  
は偏々或は或の漢字彙の或の形に一致したる。等位、或は  
言ふは、製字（或は狹字）の原自ら異なると、す。殊

楮疥鏡鏡

〔丙〕 如名抄所、作の持書には見えず。後列に（果

鏡）に出る漢字、4字、楮疥新篇

〔丁〕 製字、ノ字、鏡

私は前稿以来、一貫して待字を右の〔甲〕〔乙〕〔丙〕で考  
えていた。この両者で、〔甲〕には舟滴滄滴の字比はな  
い。が、〔乙〕は問題を孕み、如名抄の場台は、短と等

位の説明で洗はれ、セウ由来がよく分つて、躊躇するこ

となく待字と断念出来る。しかし、一般論的にいへば

のセウ簡字には行方不明。一字くわ出自が皆が皆必ず

しも明瞭である訳ではないうて、頭を傾けることも實際

には多いは致し方がない。製字の説明をつくもうはく

の〔乙〕は含みだに身も強ひば、実は既製字を皆が固可

に洗はれ、つまり固詞の場合も必ずあり、セウ境字採は微

妙である。私としては、一般論に、今、如名抄のよう

場合は〔乙〕とし、然らばうるものは、固詞より境字採

と言ふよりは寧ろ境字採の採留してよくという立場を

とつていく。〔丙〕は漢字と考ふる。微、を除いて他は

皆、果類で修飾一致する。如名抄で未詳としたのは、寧

注も言うように、漢文から始つて、玉着、唐鏡、広鏡が

たぐまのり字書、鏡着の所見がなからであるが、これ

らう字書類以外では使用された漢字のようである。

それ、果類以前に字書に登載されていないものは、或は

は俗用で出たものかも知れないが、広鏡より約半世紀

後の果鏡（一〇六七）には出、しかし、皆が固の意

味もさうなものは決して偶然と一致はないう。我が

固では漢字を元通り使用してのありである。狭つて、〔

丙) は倭製ではなくして、本来漢字だと見做すべからず。唯、檄 倭製に初出というが、こゝに八は用法に於いては八五に八入るのみ知れり。倉敷又良乃知に見えう字ではあるが、こゝには何物なるか未詳である。狝つて、栗棘の「檄 疥癩切 音檄 刺七」と合いうのどのいも分るをいって、疑問の俤に置けておく。へ丁) 倭字は、云字に漢字を兼ねるから云論。漢字である。音書 鉈 は、説文に「鉈 又、倭、鉈」とり、龍籠子鑑には「鉈 漢 鉈 鉈 短手」とり、問題になる。いである。筆注に「こゝに既に書らるべからずはなわらと論駁している。思ふに、説文の 鉈 とつて、しむる俗用というは、倭漢の均泥したうではなわらうか。

とらうで、未詳字に關しては以上如くであるが、一面、當書には、倭字に至る者を見せうなると普通の方之らいていふ字も、未詳字といふことばまある。代表的な字で、鰐イカルガ がせいである。當書には、胡岳反という反切まで付けたのである。筆注には、「諸書を載僅見於此」と説う。また、鰐音切(胡岳)一名胡鰐、う所へも、筆注の言う如く、「諸書に見 故類聚名考抄載

是名 云未詳 となる字をうである。こゝには如何なる理由に基くかの。未詳を添はたの、せよと考付たかのたうか、せよとせよとなつては不詳である。

かくう如く分析した如き所々未詳字は、では、こゝに新漢字鑑ではどうなつていふか、また、名考抄にはどう引き難いといふのを、次に一覽して、せよと考す

新漢字鑑	名考抄	新漢字鑑	名考抄
鉈	未詳 ソマ	鉈	未詳 トミ
檄	未詳 ハンゲ	檄	未詳 音倉
狝	未詳 カカキ	狝	未詳 イハシ
栗棘	未詳 サラゲ	栗棘	未詳 俗用也
龍籠子鑑	未詳 ククゴ	龍籠子鑑	未詳 俗用也
疥癩切	未詳 カカキ	疥癩切	未詳 俗用也
音書	未詳 カカキ	音書	未詳 カカキ
胡岳反	未詳 カカキ	胡岳反	未詳 カカキ
鰐イカルガ	未詳 カカキ	鰐イカルガ	未詳 カカキ
胡岳反	未詳 カカキ	胡岳反	未詳 カカキ
諸書を載	未詳 カカキ	諸書を載	未詳 カカキ
一名胡鰐	未詳 カカキ	一名胡鰐	未詳 カカキ
故類聚名考抄	未詳 カカキ	故類聚名考抄	未詳 カカキ

綴	○支利及致七	○丁康及到	○着支カナン
綱	×	○或(綱注)	○古岳及カナル
新	×	○薄鈞バカ	○俗(ト)胡胡
新	×	○新	○音和未詳
新	×	○イカルカ(小字)	○カケコフ

へ訂正字

前々分類した甲乙丙丁の順に並べ、×印はセリ字が見えたりと、○印は見えなくと、新漢字鏡の殆ど内々(小字)は、小字篇字に於きとを不詳、序に、27字以外に、鵲を付け加え、また、イナをば見らぬ者らしいとは、ニつある。一つは、知名抄と新漢字鏡に共通するものは十三字に過ぎなく、特に小字篇字には五つしか合致しないといふこと、今一つは、名義抄には三字を除いて殆んど登載され、しかも、ハ甲乙は大部分が未詳(また俗用)として、知名抄をセリ終り引いていふといふことである。これらは何を意味するにせうか。

前者のフリで方えらぬといふのは、まず兩行書を取扱領域の違ひにあり、また、セリ成書意識・態度の相違である。特に、新漢字鏡は凡ゆる字彙を体系的に編纂したものでなく、**「於音見 順所鳩養」**にあり、**「部文之内精石搜認」**(字知平の**「搜弁」**)として、**「後覽處有」**

に、善加諸類、云々を託した、云々、不完全な序條書である。従つて、知名抄に見えらぬ如き字を、俗々目晴しをかつたもの、或いは、倭字をうばひた、故紙に落したものが、もしセリだとすれば、何を以て小字篇を付加したかの、今と云つては定かにはし難いといふ。字は、いかに字書が雑多なり、価値なりが露かに認めらるゝと、それらあり、猶有れつりては、知名抄・名義抄の親子関係が、いかにだつても見えずはつきり言える。従つて、前々分類したハ甲乙丙丁は、いづれ順序によつて、次第の問題視するといふが、倭薄にならうは当然である。つまり、ハ甲乙は倭字として定著していり、ハ乙乙は倭字と方えていり、然らずは、手まの漢字に注を付けていり。ハ丙乙ハ丁乙は余り抵抗がない。

三者の關係以上を知らざれば、いかに留意しなかつたか、いかにいふか、いかに如き倭字が常に「俗」として倭に括弧付いていりといふことである。漢言すれば、倭名抄序文にも言う如く、「俗人」の「漢語」乃至「漢語」に倭字が深く係わりたりである。これに、漢土系群の重大意義から言へば、成程、倭語に於て訛謬にあり、いかに、いかにを正すれば、実は同じこと、我が國人

の聲明、言うなら、生活の知識の發現である。それ  
にて、如の通り、「倭字」となるうじである。

4

以上のような準備をしておいて、いよいよ、新撰字鏡小  
字篇字の検討に入る。その方法は、まず、小字篇字を陽  
出し、現在普通用部首より、その部首の、巫教の、カ  
しりから順に通し番号を付ける（各部首内は順は本書通  
り）。小字篇字の陽出は、天治本と字知本の二本を対校  
して、天治本の注文に於て、いづれも若干引き出  
し、また、字知本で、訓ウケ字、具体的には山田彦雄  
博士の「新撰字鏡跋異」で、小字篇字の傍にある、天治  
本には見えずして、字知本に於て見えず字を引取り上ケ  
てきた。その結果、女・木・炒・出・酉・金・魚・鳥部  
の順で、四四四字を得た。天治本の意、して字知本のよ  
うに四五五字（十三字）あり、天治本は有つて字知本に  
有つても、七ナ七字である。いづれ一をわけて、傍にたうじ  
あるが、傍にたうじは、漢橋大漢和辞典、原照字典、そ  
して、古字書録台索引である。七ナ七、前題の理由で、  
一位、朱鏡まじりも、見えず字をケエツクする。その

すうと、唯、内実に入らぬとなく、単なる外訳の一致  
を数える限りでは、多クウ鉄問字を食めて半数以上の字  
が既に漢字彙に存するうじである。いづれは筋にも言つ  
ておいた。また、筆法式に朱鏡を除外して、七ナまじり  
しり、つまり、朱鏡まじり見えずも、限ると、数十字が  
なお筋に落ち、百数十字が漢字彙に存するといふう  
じであるが、それにして、いづれは「小字篇字四  
百字字」といふうじの程度であるといわねばならぬ。そ  
して、今から、仔細に眺めてみよう。

後々一覽表としておす。全小字篇字四四四字の内、  
形奇の漢字七の傍にも、カクトリ三ナニ字あり、ま  
た、奇の一致からして、形ウケ異字を、もし、某ならば七  
は、漢字七の傍に考えらぬといふが、カクトリ十三字の  
うち、私が見た。それ、前者は、カクトリは、漢和  
あり、もし、右の兩者を漢字として認むるとすると、計  
四十五字で、四四四の差引くと、小字篇字は一字は  
あつたが、四百を割るといふなる。それ、もし、四百字  
の字を生かそうとすると、右の四十五字の次の十  
八字を引いたが、いづれも、いづれは、異字字乃至、カ  
字である。（漢字の上の数字は、一覽表に於ける通し番





へ入らる。本書の少異字をテリ修訂をテる部は、  
そのあり知れぬ。七の「意」の「は」は、「異字」も多  
く、世の「意」は、「は」の「は」にてし。(玉勝問卷三)、

何故に「は」の「意」を「は」の「は」にてし、  
ハナハナ、もし「ハ」の「意」が「明」の「ハ」にてし、  
或は考えて、何故に「ハ」の「意」が「明」の「ハ」にてし、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

三) 以上ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、  
ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、ハナハナ、

けりといふも、ともかく一見、倭字らしき字遣りし取入を以てしいる。こゝに訂して、中世以降の倭書には余り見られぬ。下学集や節用集等は、こゝに「ア」字は蓋難しなり。と言つて、倭字自体が「ア」字に似て居る、真名本等に於てよくあるように、また訂讀のし易い、用いられたうである。しかし、こゝに比較的、皆々トつては辟IVの如くせしめられた、倭字事情が推測し易い。こゝに倭字の消去の問題が浮ひ上つて来よう。今日では、漢和辞典等に倭字を載せる場合、本書から直接に引くようにならぬ。むしろ、流れたやうな読みかゝる字も、字にも言わぬ字である。皆々トつて両者は個人種々の強りもあつて、こゝに意味では簡単に纏う難い。この問題としては方々におかすにせよ、知らぬ。

① 注

- ① 文字と表記法 (現代国語学 II 所収) 42ページ
- ② 漢字の研究 (国語学講座 所収) 22ページ
- ③ 国語学—国語学文字研究 45 (三有堂) 60ページ

④ 注③の所より引用

- ④ ④ 倭字小方 (岐阜大学国語学)
- ⑤ 新漢字鏡の再検討 (本邦辞書史論叢 所収)
- ⑥ 倭字の由来 (未詳字、認定した、矢野的に見て)
- ⑦ 人によつて若干のずれがある。
- ⑧ ことば本流中の各書、比較的よつて合う。一書が未詳としても、他書には字然と反切を付けて判別がし易い。
- ⑨ 七の反切が何れか、不明である。
- ⑩ 七の反切は、七の意流裡に、倭字の認定に多ク個人差がある。

5 (付表)

前述した方法によつて、小字爲字の簡字を考証を付表として、こゝに掲げる。こゝには、不備をもち、所収の訂して不全を期した。番上り数字は、通し番字、流流に用いた番字は天治本にあり。番字の上は、印を付した。本表に抄録した。漢字の訓は片仮名直す。但し、濁字は

付ケザリ。セウ下ッ括弧内、漢字は字知テウ字。次ハ、漢字兼ハ同字形ハ見エテウツタ。蓋ハ拘わりテウ。印を付テ。△印ハ蓋シ果ナラシ。セウ果ナラハ漢字兼ハありトイフコトモ有テ。言ハハ誤レリ。X印ハ漢字兼ハ見エテウ。痛方欄ウ書名ハ次ウ略テウ。

② 漢文 ③ 玉篇 ④ 龍龕手鑑 ⑤ 字彙

① 唐韻 ② 広韻 ③ 集韻 ④ 正字通

A 名書抄 B 全鏡年 ④ 和名抄 ⑤ 伊呂歌字鏡

右以外ハ書名をセウテウ書ク。但シ、セウ字ウ説明ハ必ずしも原文通ラハ引カレリトガ有テ。合テ易イよう。便宜上テ字級名「簡年」ハシテ。

No. 1	天治年	瑞	方
1	瑞コナク	X	卷ニ親族部ト既出。Aトハ前妻・妻・好妻コナク。Bトナリ。
2	瑞ムカヒメ	O	月右。また、瑞・適シムカヒメ。②トハ女子不浄也。Bトナリ。
3	瑞オミナ	X	Bトハ瑞ラムナ。Aトハ矩オムナ。
4	瑞ヘナ	O	卷ニ既出。但シ、妹。②トハ東国名。また女子。妹ハ②妹ウテ字テ既出。Aト

16	瑞佐那(瑞)	X	Aトハ妻ナカニ。
15	瑞	X	
14	瑞イナヒナ	O	②トハ妻名ナカニ。Aトハカラタナエテ
(13)	瑞スナノキ	△	蓋シ瑞木ナラン。本書ト瑞ナスナリ。
12	瑞スナ(瑞)	X	ミナリ。蓋シ。
11	瑞スナ	X	奈ウ是ハ奥ウ。瑞ナラガ②トハ。本書忍即及。控 類篇 本名。本書カマノエ。
X 10	瑞シ	O	②トハ業ハ可シ。業ハ②侯ナラシ。
9	瑞ハハツ(と)	△	挿ハ。Aト瑞瑞ハハツノ。挿ナリ。瑞ハ平書トシハハツ。①挿瑞行本名。イナ。挿ハ瑞ヘラト見エ。Aト挿ヘラトナリ。蓋シ圖ウ略ガ書通テ有テ。
X 8	瑞ハハツ	X	②トハ業ハ可シ。業ハ②侯ナラシ。
7	瑞ムク	X	後出ウ。瑞ナラガ。④トハマコトト訓テ。
6	瑞ムク	X	②トハ瑞瑞玉クナリ。瑞①瑞木ノ訓名。本書ハシナリ。瑞 瑞混トナリ。
X 5	瑞女獨	X	合字ナリ。類集文字抄(統御書類集)

17	担 モチキ	(担)	△ 奪。目は固キテ。◎ 担チ名。また阿は担持キ。Bトあり。
18	林		X Aトいハ措林。また柴チ汁。切措考。照。赤は川筋ハあり。林トらハ◎トあり。
19	櫛		X ◎ 抗。俗字。抗ト名。◎ 抗。海字。抗トらハAトあり。
20	抗 ウツキ	(抗)	◎ 抗。俗字。抗ト名。◎ 抗。海字。抗トらハAトあり。
21	櫛		X
22	櫛 クナナシ		X Bトあり。奪日◎ 葉音置標字也。A葉。
23	抗 船ノカタ		◎ 抗。◎ 抗は舵。◎ 浮化。Aトは抗身作。舵カチ。
24	抗 ヨコキ マクラ		◎ 抗木(大ナツリ)。但し、意味よりす。いハ抗ハ。抗ハ本音にも車下標木也。
25	櫛 ウツキ		◎ 剣木入(救セ(ほセ))。
26	櫛 カキ		◎ 塔云尖頭標也。◎ 櫛云。類屬木名。
27	櫛 ナツメ	(珠)	△ 珠◎ 短珠也。珠◎ 本名。Aトは葉標葉。葉ナツメ。
28	櫛 ユナキ		X
29	櫛 スチ		◎ 櫛。◎ 櫛標木名也。◎ 櫛ト云。A櫛標木カキ。A櫛標木カキ。エニスノキカラクナ

31	櫛 トコ		◎ 櫛。A 櫛シチ。櫛俗標字。◎ 櫛ト也。
32	櫛 ホヤ		X 本音に撰宜黠及木以移ト著ナトあり。撰ハ。撰トらハ◎ト名。
33	櫛 カ		◎ 櫛也。また本名。本音に徒谷及小櫛也。置トあり。Aト置。Bトあり。
34	櫛 ヤツ木		△ 櫛◎ 答。A 礼答。置トらハ本音トあり。
35	櫛 マツキ	(櫛)	X Aのマツキハ根破。マツキハ根破。根ハ。幻殺考也。
36	櫛 ウツキ		X Aのウツキ抗抗短破。また標ト許あり。
37	櫛 エツリ		△ 巻ハトれあり。◎ 櫛屋標也。意ト同じ。
38	櫛 ユカ		X 床の葉字也。
39	櫛 コシキ		X Aラコシキ。また櫛俗標字。本音は蓋レ葉字トらん。
40	櫛 ヌト		◎ 不担。接柱上標也。又同指。本音に徒谷及。入柱上ト。ハト本。
41	櫛 マセ		X Aト櫛持標マセカキ。本音ハ櫛クスノトあり。櫛トらんカ。
42	櫛 シシクハ		X 本音巻トト直然。年茂。置トあり。レシクハ。以トもリト◎ 櫛ト名あり。

51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72
檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜
ツキナヒ	コマシ	カイ(檜)	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
X	X	○	X	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
A音味及刺及味、(り)。松の檜也。	はに檜指イネコフ。	本書に檜也とあり。檜指用。Aカク	Aは檜下ハシラ持谷とあり。	類名木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。ミルナラ。本書にもあり。混	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。

73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94
檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜	檜
ツキナヒ	コマシ	カイ(檜)	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
X	X	○	X	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
A音味及刺及味、(り)。松の檜也。	はに檜指イネコフ。	本書に檜也とあり。檜指用。Aカク	Aは檜下ハシラ持谷とあり。	類名木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。ミルナラ。本書にもあり。混	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。	の檜木名。Aは檜指スキノキ。スナ。

89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	
杯 ムラキ (瓊)	杭 クヒヒ	椏 ナシノナ	椏 シエト	椏 シエト	椏 ク	椏 ク	椏 ウカキ	椏 スキノキ	椏 ナラノキ	椏 アナノキ	椏 ムラノキ	椏 クルミノ木	椏 カシハキ	椏 ホフリ	椏 ホフリ	椏 ホフリ	椏 ホフリ	椏 ホフリ	椏 ホフリ	椏 ホフリ
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
椏 ③ Aカラヲナ。	椏 Aクヒ。本篇に最末及本名一曰腐	椏 ④ 茶本作椏。Aにナシ。Bにナシ。	椏 ⑤ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑥ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑦ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑧ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑨ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑩ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑪ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑫ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑬ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑭ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑮ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑯ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑰ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑱ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑲ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑳ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉑ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉒ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。

95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70
椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ	椏 ムネノキ
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
椏 ① 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ② 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ③ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ④ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑤ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑥ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑦ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑧ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑨ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑩ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑪ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑫ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑬ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑭ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑮ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑯ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑰ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑱ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑲ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ⑳ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉑ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉒ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉓ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉔ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉕ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。	椏 ㉖ 椏着 吳語謂椏也。A Bにナシ。

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106
種	類	類	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種
家アララキ	類	サルカキ	ハクハラ	木	サセフ	(株)	ムシ	マキ(楡)		ハヒノキ	エノキ	シシ	山キ	木ノキ(杜)
X	△	X	○	X	X	△	○	X	X	X	X	X	X	△
必孫アラキ	A 浴類		A 華ハクハラ	A キノ	楡	松	枇	楨	楨	A 未詳	B ト	A 種	フシ	杜
	類		② 種炒名	④ 葉	木名	⑤ 綱	⑥ ヒ	楨と旁	楨	楨		楨	キハク	① 木名
	類		① 種炒名	④ 葉	木名	⑤ 綱	⑥ ヒ	楨と旁	楨	楨		楨	キハク	① 木名
	類		① 種炒名	④ 葉	木名	⑤ 綱	⑥ ヒ	楨と旁	楨	楨		楨	キハク	① 木名

121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136
蓮	蓮	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種
蓮	蓮	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種
○	○	X	△	○	X	△	X	△	○	○	X	○	○	○	○
蓮	蓮	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種
蓮	蓮	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種
蓮	蓮	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種



154	155	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138	137
海	藤	藤	藤	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
ヒラテ			クホテ				ウコ									イモ	イラ
X	X	X	X	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△
Aヒラテ			④クホテ	①葉ナリ	△奥具玉鏡ル音本	○竹名	○前	X A撰	○	△	○	X	X	○	○	○	△
藤珠			Aクホテ	A B葉	葉未詳	Aクナムラ	葉及	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉

172	171	170	169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157	156	155
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
ナモク	タフシハ	ソラシ	カマ	スケ	ナメナハ	ハフハラ				ヒシ	ススホリ		ハハナ	ナキ	カチ	ナキ	ナキ
X	X	△	○	△	△	△	○	○	○	△	X	○	X	△	○	○	○
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉

179	178	177	176	175	174	173
緑	茶	茶	茶	茶	茶	茶
(緑)	カラムシ	マキツク	ツラナクサ	トモクサ	アチサキ	ナモク
×	○	×	×	○	○	×
	茶字。①茶からまじれぬ也。 172筆参照。	A 比類 マキツク ニハノサ。	A アチサキ マワル。ヨルヨリ。	○ 俗名。A 師務 下路草名 水シタミ 師上	○ 俗名。A アツキナキ。	× 俗名。茶字。茶葉 葉 常思 等よりウケ合

204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190
緑	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
フフキ	ノキ	カウ	オトキ	チヒサクラ	ニハクク	ウリ	カカミウリ	ヤフク	クク	大	サナ	チナ	カシクサ	ヌカサ
○	○	○	△	○	○	○	×	△	○	×	×	○	×	×
○	○	○	A 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎 虎	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力	力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力 力

220	219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	(207)	(206)	(205)	
蜂	切	虫	燈	蛹	蝶	刺	刺	蜂	蝶	幼	蝶	蝶	着	友	葉	
足マツヒ	カキキリ虫	ノキハ虫	玉虫	アマヒコ	青ムシ	カイ	キサク	ニシ	ク	シラミ		又々	クネ	水フフキ	フフキ	
○	×	×	×	○	○	×	○	○	○	△	○	×	○	○	×	
⑨出名。Bアシマトヒ。本書は蝶類マシ	Aカキキリムシ燈標蜂。 Bトタウ。	Bトタウ。	⑩タマムシ。Aタマムシカ ⑪証	A蛹類オニ青角キヤウ。	⑩カ。空⑩出名。⑪出名。石ヲ精也。	Aオネハタオト。蝶類同。虫。オト塔カキ。	⑨小飛虫。 發于通じト。切カキトタウ。	⑩海虫名。⑪オフ。本書に蝶シラミキヤ	⑩群虫名。Aニシ。	⑩塔標ニ息也。直音ト。或ケカシ。	⑩群幼虫也。A幼幼幼虫。	⑩群幼虫也。Bコロキ。	A烟ヌ。本書には群幼虫ヌミトタウ。	⑩⑪笔葉。⑫アサナ。天治本 芳々ネ。	⑩Aヤトル Bハタス。天治本 茂茂	木は葉をふるん。

217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201
蛹	幼	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶	蝶
上(とと)	虫上	若節食虫	ク(毛)	不食虫	玉ム	エ虫	角ハな虫	フリシ	キリク	ハハ	カハホリ	カキカヒ	カタアキ	カ	カメ虫	イ虫
○	×	○	×	×	○	○	○	○	×	×	×	○	○	×	○	○
⑩⑪出名。山加珍異に類記ヒラムシ。	本書は群幼と上タウ。	⑩不足去食節。A若節食。⑪オホムムシ Bアハムシ	⑩オホムムシト通じト。A(蝶)。	A蝶類カニ。群幼トニ。		⑩蝶ト同じ。⑪蝶成蝶。本書に群幼	⑩ケヒ及 食糧不食也。Aケヒ及。Bイ ナコマ。不食 蝶カ幼蝶へ註。或也 蝶 類。然去ハ角也。或も虫。	⑩群幼虫也。A幼幼幼虫。	A群幼幼虫キリク。	Bハタ。本書に群幼タウ。	A群幼トフ。古書類聚同也。	⑩群幼幼虫也。⑪群幼幼虫。A B群幼幼虫。	⑩若節蝶類ト同じケケウ。		⑩群幼幼虫。群大幼玉也。A群幼幼虫。	⑩出名。



218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	
銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ

205	204	203	202	201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190	189	188	187	186	185	184	183	182	181	180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	
銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	銀	
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	
①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝	㉞	㉟	㊱	㊲	
カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ

106	錫金厚	X	A 鉄落クロカネノハター一カナクツリ。
107	錫タカネ	O	① 釜或片鑲金厚也。鑲② 釜(足金)。
108	錫金鉄	X	或ハカ鉄ハ。③ 鑲也。中華大寺受。ナリ
109	錫	O	④ 鈴戸ニ鉄。B レイノコエ鉄。A 鈴 エラムク。
110	錫マサカリ	O	俗。A 音成。鉄音成。鉄音。B ラノ。本 書ハ。鉄(錫)マサカリナリ。
111	錫カナ(錫)	X	本書ハ。錫カナナリ。A B ② 錫ロクカカナハ。
112	錫ハナク	X	本書ハ。錫ハナク。A 錫ハナク。
113	錫句金	O	① 錫錫ハ小鑲也。② 小鑲也。A 鑲金鑲 及ハルニル。本書ハ。曲尺マカリ金。
114	錫トクス	X	矩ハ。序ハ。ハ。矩③ 唐門也。
115	錫ホコナキ	X	A 鑲金ナリ。B マラケト。ホコナキ。本書 A 錫
116	錫赤金	O	④ A B 錫ノコナリ。
117	錫イ物草切	X	A フケキリ。
118	錫水金	O	⑤ 青苔。片鑲金ナリ。B ホムヨシ。
119	錫	X	A 水カネ。B 錫水金。参考。
120	錫ハラ	O	⑥ 針則也。或作針。⑦ 同針。A ハラ。
121	錫	X	新レ。ハ中華大寺受。マダ。ネ。シ。ラ。ム。

122	錫マリ	X	錫ハ。① 錫錫② 錫ナリ。A 錫ナリ
123	錫ノホナリ	X	錫ノフナリ。錫ノエナリ。ナリ。錫ト同ナリ。
124	錫	X	錫ナラド③ 鑲。A 取火者。
125	錫タツキ	O	④ 或片鑲。小鑲。A タツキ。
126	錫	O	⑤ 丁ノケ。かんナ。A タツキ。本書。錫錫錫。
127	錫	O	⑥ 錫也。B タツキ。A 錫錫錫。ア。フ。ラ。ツ。キ。
128	錫	X	B カンナ。
129	錫	O	⑦ 引也。不。作。塊。A マサカリ。
130	錫フキ(錫)	X	A 錫フキ。錫ナラド⑧ 金大カ者。
131	錫	X	
132	錫カツチ	X	
133	錫	X	
134	錫金(火カ)	X	
135	錫カント	X	イ。本書。錫カント。
136	錫	X	A 鑲金カント。考。ハ。鑲。金。ハ。鑲。金。ハ。
137	錫	O	⑨ 鑲。考。ナリ。竹。冠。者。ナリ。ハ。⑩ 食。者。
138	錫	O	⑪ 錫。考。物。也。
139	錫	X	⑫ 考。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
140	錫	X	⑬ 考。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。
141	錫	O	⑭ 考。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。

159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144	143	142	
鉄	針	針	鋼	鉄	鐵	鐵	鉄	鉄	鉄	鋼	鋼	鉄	鐵	鉄	鋼	鐵	鉄	
カタヒ 火打	キタフ	シト 金	立金	馬 ハカキ	キタヒ 金	スミ カキ	サヤ (鉄)	鎌 ギ	ホコ (鉄)	カナ 上	サ 上金	ス キ	ヘシ キ (鐵)	ヒル 白 (鐵)	金 白	鐵	鐵	
×	○	×	×	×	○	○	×	○	△	×	×	○	×	×	○	○	×	
Aネリカネ。新レク口持海ホルミウ。	①金七。		鉅ならば①大剛也。	Bカハサキ。	①兵岩、針屬也。Aカラスキクハ。鉄鐵	①子隆及。A塔融字角。Bトロムカストク	新レク口持海鉄レミウ。鉄ならばハサキ。	①鉄に同じ。鉄①刊也。	A鉄ホコ。	149鉄カナ上。火打考照。	A鋼鐵。	①連糸釣。A連釣。	①鉄ヘシクキ。門ニススリ。別鐵スキ考照。	①鐵①A鐵。	①鉄金確り。	金字ならん。	①鐵七。②堪。Aカナハシ。鉄鐵カナシキ。	Bラル。④カナキ。⑤鉄鉄カタシエ。金字ならん。

178	177	176	175	174	173	172	171	170	(169)	(168)	167	166	165	164	163	162	161	160	
針	針	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	鐵	
フナコ (針)		サハ	ハエ サメ	ナ マツ	サハ	サメ	サヒ チ	カセ サハ	ハラ クキ	ヘシ クキ	胡 瓜	手 カシ	カ ヨチ	カ カリ	ハラ (鐵)	ユリ テ	カナ ハ (鐵)	カヒ (鐵)	
○	○	○	○	×	×	△	△	○	×	×	○	○	×	×	○	○	○	△	
①針俗音ナ。A針針フナ。		不規魚有力者。A奥大有力。	①俗鉄云鉄今。Aハエサハ。	Aナマツ。Bトビ。	Aアラサハ。	A鋼鐵サメ。不規鉄ハエ。②鋼鐵ハエ物	①魚。不音に鋼サヒチナリ。鋼鉄①②	①魚名。雄ウマシ。Aカセサハ。		①胡瓜切。鉄名ナリ。Aヤサキクハ。	①音加。A塔伽字テカシ。Bキツナ。ケカリクエカシ	①音加。A塔伽字テカシ。Bキツナ。ケカリクエカシ	A鉄治カチ。蓋シ。鉄師ヲ合字ならん。	加鉄オカリ考照。	A鋼ハラ。	①鉄七。②鉄ヒタシ。A鉄ユリテ。	①魚ヒメ。Bネフ。季、鉄鉄ハ同じ。	①鼎屬。鉄①鼎鉄七。A鉄鉄マカリ鉄七。	







俗に 音来 鶴一以音介唱 五扶去 又音去 とり。  
 鶴は 音来 鶴一以音介唱 五扶去 又音去 とり。  
 めり。また、字形が類似より、ナすいば、Aに鶴鳴鶴  
 今或正 音介 雀似鶴而音 とり。真中々々、或持々  
 字を得らるる。

補註 ③ 雀相似 鳥 ささぎ 雀 雀鳴鶴 夏鳥鶴去 秋鳥鶴登

冬鳥鶴去 桑鳥鶴胎 録鳥鶴丹 行鳥鶴音 宵鳥鶴噴

とり。雀一 から出たか。 久々分鳴は久々分鳴か。

本語に 鳩 明声及上 鳥 上同鶴 とり。 ④ 或作

音 今作鶴 せして、鳥鳴 音 鳥名 二用とり。

Aに鳩鳥 九一鳥 とり。 本時珍曰：鳥類有九種

(一) 注序を類聚抄による(等)説明で理解する。

右ニナカ、本だが思いつく程度で、詳しひ考証は後

なすいケル。ほんならた。

ハ付記 獨逸、横山士郎「和製漢字新考」(帯広畜産大  
 学学術研究報告三一) 昭和22年) なる論よりある。  
 とり知った。そむでは当然、新漢字鏡小字篇に及べ  
 とりるが、天の計算で、四〇五字(うす) 字知本

クツも(四字) 本傍字となる。しかし、セッ新語規

はなすいで知らず、唯、「新漢字」で言ひ言ひ

である。セッ「新漢字」は二十字程度預備で、セッ

範囲に及ぶには、「おめ」より四百余字は、セッ

んじが和製漢字で、こいば、和字集録・最初である

といふ説は首肯されるが、後世に言わゆる「いわゆる小

字篇に含めておく知字中、今から新漢字に

わづらうし。は、言葉の文ででもあうく、少

しく納得れる。しかし、セッ次々「した」にて、セ

の邊に、小字篇以外で一般漢字中、知字が入った

る公算が高い。という(本書) 欠陥は私も同様で

本稿中にも触れたとくである。横山論より新漢字鏡

が主眼にならうと、記述を簡略にすべからう

が、傍字一般の概観は、こいばで以て要を得る便利を

得る。但し、新漢字鏡には、「西」部が小字篇九

字が見落されてる。

(完)